総選挙結果をどう読むか

いつもながら選挙当日は、開票速報が気になり寝不足になる。とりわけ今回は、選挙後の「不安」と「期待」が入り混じり、複雑な気持ちで朝を迎えた。

昨日のレポートのジャーナリスト筑紫哲也さんなら、どのように選挙結果をコメントするであろうか。結果は写真の朝日新聞 15 日 1 面見出しに集約されるが、現時点での私なりの感想を書いておきたい。

第 1 に、なんといっても投票率が 52%余りと戦後最低を記録したことだ。師走の寒いなかでの選挙とはいえ、これは国民の政治不信を物語るものだ。解散・総選挙の「大義」が問われたが、戦後最低の投票率からも選挙自体の意味が問題になる。

第 2 に、事前にも予想されてはいたが、与党が大勝し、安倍政権の基盤がさらに強固になった。このために選挙に打って出たわけであり、「読み」が当ったかに見える。自民の議席が 300 を超えるという予想もあっただけに、前回より議席を減らしたことは注目される。当分は安倍「1 強」という状況が続きそうだが、「やりたい放題」の暴走に懸念される。

第 3 に、野党は民主と「第 3 極」の低迷に対して、共産が躍進を遂げたことが特徴的である。2 年前はあれほど騒がれた「第 3 極」だが、次世代は壊滅的な落ち込みである。維新は橋下共同代表が投票日前日に「敗北宣言」までしたが、現状維持にとどまった。自民の「対抗勢力」としての共産の躍進は注目してよい。

第 4 に、沖縄の小選挙区で自民が全敗したことである。「オール沖縄」で 4 つの選挙区で候補者を調整して、野党が自民党に挑んだ。先の沖縄知事選と同じような構図だ。知事選で翁長氏が大差で当選したにもかかわらず、政府自民党は「粛々と辺野古への新基地建設をすすめる」と公言してきた。これに沖縄県民が反対した結果が、今回の小選挙区での自民全敗となった。

知事選から今回の選挙までの沖縄の取り組みは、今後の「選挙協力」のあり方を考えるうえでも重要な教訓を示すものだ。

（2014 年 12 月 16 日）